

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月6日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03474

研究課題名(和文) 帝国・君主・コモンウェルス - 初期近代ブリテンの経験と記憶を探る

研究課題名(英文) Empire, Kingship, and Commonwealth: Experience and Memory of Early Modern Britain

研究代表者

木村 俊道 (KIMURA, Toshimichi)

九州大学・法学研究院・教授

研究者番号：80305408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、「帝国」「君主」「コモンウェルス」の3つの観点から、ルネサンス期から初期近代(16～18世紀)にかけての「イギリス」政治思想史を描き直すことを目的とした。

その結果、とくに同時代における「帝国」と「君主」をめぐる政治的言説の展開や、マキアヴェッリに代表される帝国論と君主論の受容、「グレート・ブリテン」の王を名乗ったジェームズ6世・1世や、ロバート・セシル、フランシス・ベイコンといった顧問官による統治論の様相などを通じて、複合的・多角的な帝国の統治を可能にした、初期近代における「ブリテン」の経験と記憶が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの「イギリス」政治思想史はもっぱら、「デモクラシー」の展開や「自由主義」の発展、あるいは「近代国家」の形成などに関心を寄せてきた。しかし、本研究においては、初期近代(16～18世紀)の「イギリス」がイングランドやスコットランド、アイルランドなどから構成される複合的・多角的な君主国(「ブリテン帝国」)であったことに着目し、新たに「帝国」や「君主」などの観点から、この「ブリテン」を舞台とした、新たな政治思想の歴史の諸相を描き出した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to revision and rewrite the history of early modern English political thought in terms of empire, monarch, and commonwealth.

Exploring contemporary political discourses on empire and kingship, the reception of Machiavelli's The Prince and Discourses, political thought of King James VI & I, and political prudence of his counsellors (Robert Cecil and Francis Bacon), it is made clear the early experience and memory of the British empire, and the art of politics for the government of the composite and multiple monarchy.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：帝国 君主 コモンウェルス ブリテン

1. 研究開始当初の背景

「近代イギリス」の歴史はかつて、西洋文明の「模範」を示すものとされてきた。それゆえ、政治思想史研究においても、ホッブズやロックの社会契約論などを中心として、「デモクラシー」や「自由主義」の起源や発展、あるいは「近代国家」の形成の過程が描かれてきた。しかし、「ウィッグ史観」とも称されるこれらの歴史叙述は、ケンティン・スキナーの『近代政治思想の基礎』や J. G. A. ポーコックの『マキアヴェリアン・モーメントなどに代表される「ケンブリッジ学派」の研究や、イギリス史学における「リヴィジヨニズム」の進展によって、大きな書き換えを迫られている。

これに対して、報告者はこれまで、16世紀から18世紀にかけての初期近代(近世)のイングランドを対象として、「近代」や「文明」、あるいは「教養」の歴史的な意味や意義を問い直す作業を進めてきた。本研究は、これらの研究成果を踏まえながら、同時代の政治思想を歴史内在的な観点から理解するうえで、新たに(1)「帝国」(2)「君主」(3)「コモンウェルス」という3つの主題の重要性に着目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「帝国」「君主」「コモンウェルス」の3つの観点から、これまでの「イギリス」政治思想史を描き直すことにある。

近年のヨーロッパ史研究などで明らかにされたように、同時代の「イギリス」は、一元的な権力や均質な国民による「近代国家」ではなく、イングランドやスコットランド、アイルランド等から構成される複合的・多面的な君主政国家「ブリテン」であった。そこでは、デモクラシーや自由主義、あるいは近年盛んに研究されている共和主義とも異なる、「君主」を中心とした「帝国」や「コモンウェルス」の言説が展開されていたと考えられる。

本研究では、このような問題関心から、複合的・多面的な「ブリテン」の統治を可能にした人文主義的な政治学の展開や、その経験と記憶を探る試みがなされた。

3. 研究の方法

本研究においては、これまでの研究成果や、歴史学などの隣接分野を含めた近年の研究動向を踏まえながら、「帝国」や「君主」に関する政治的言説の歴史を編み合わせ、総合するとともに、とくに同時代における人文主義の重要性に着目する。具体的には、ジェームズ6世・1世をはじめとする君主や顧問官、行政官たちによる統治論や、マキアヴェッリに代表される帝国論と君主論の受容などを織り込むことによって、「ブリテン帝国」という君主政国家=コモンウェルスにおける政治思想の独自の展開を明らかにしようと試みた。

また、以上の作業を遂行するために、公刊されている一次資料や政治思想史関連の研究書などに加え、Early English Books Online(平成28年度末に学内大型図書予算で購入)やEighteenth Centuryなどのデータベースを活用し、同時代の文献の収集・分析を行う。並行して、平成27年度に九州大学図書館に新たに所蔵された「初期近代英国政治思想史コレクション」の調査・分析を実施する。

4. 研究成果

本研究では、平成28年度から30年度にかけての3年間において、3件の論文発表、4件の学会・研究会報告がなされた(そのうち、1件の論文と報告は英語で行なわれた)。

(1) 雑誌論文 「マキアヴェッリ、バイコン、ホッブズの周辺 初期近代英国政治思想史コレクション 1605-1700」では、研究開始の前年度(平成27年度)に学内の大型図書に採択され、新たに収蔵されたオリジナル資料の調査・分析を行った。

このコレクションには、国内では唯一となるマキアヴェッリ『ディスコルシ』英訳初版や、『ディスコルシ』『君主論』の合冊版をはじめ、バイコンやホッブズなどを含む一次資料が計15点含まれている。本論文では、それらの資料紹介がなされるとともに、とくに「ブリテン」におけるマキアヴェッリの受容の過程と、それに伴う人文主義的な政治学の通時的・持続的な展開が示された。

その内容はまた、平成28年6月に九州大学で開催された政治研究会において報告されている(学会発表)。

(2) また、雑誌論文 「「大ぶりたんや国」の統治術—ジェームズ六世・一世と顧問官たち」では、複合君主政国家ブリテンの政治思想を典型的に示す事例として、ジェームズ六世・一世に着目した。

ジェームズは、イングランド・スコットランド・アイルランドの三王国の王を兼ねるととも

に、それらを統合した「グレート・ブリテン帝国」のヴィジョンを提示した人物でもある。本論文では、彼の『自由な君主政の眞の法』や『バシリコン・ドロン』、そして彼の議会演説などを再検討するとともに、1603年の王位継承前後の過程や、ロバート・セシルをはじめとする顧問官の言説を考察し、複合君主国としての「ブリテン帝国」（「大ぶりたんや国」）の統治をめぐって展開された人文主義的な言説や政治的な技術を明らかにした。

なお、この論文の原型は、平成29年9月に開催された日本政治学会において報告されている（学会発表）

（3）雑誌論文「Orheus' Theatre: Civility and Empire before the Civil War」は、平成29年3月にヘルシンキ大学のペルトネン教授を招いて九州大学で開催したセミナーKyushu University Early Modern Intellectual History Seminarにおける英文報告（学会発表）を加筆・修正したものである。

本研究の成果は、このように英語化され、国際的にも発信されたが、この論文では、16世紀から17世紀中葉の内乱前の時期における「文明」と「帝国」に関する言説が整理されるとともに、イングランドとスコットランドの統合やアイルランドの植民に際して、ジェームズのみならず、顧問官のフランシス・ベイコンやアイルランド法務長官のジョン・デイヴィスらによって展開された複合国家の統治論の諸相が明らかにされた。

また、平成29年5月には、隣接分野の学会である日本哲学会において、マキアヴェッリやベイコン、ホッブズを中心とした人文主義の政治学に関する報告を行うなど（学会発表）、政治学・政治思想史の分野を超えた研究成果の発信もなされた。

（4）さらに、以上の研究成果をまとめる作業として現在、『想像と歴史のポリティクス 帝国・王権・ブリテン（仮）』を風行社から出版する計画が進んでいる。それに際して新しく書きおろした序文と第2章（「ブリテン帝国の劇場 「ユートピア」から「ビヒモス」へ」）については、平成30年6月7日に行われた慶應義塾大学大学院の演習などで報告された。

このように、本研究においては、「デモクラシー」の展開や「自由主義」の発展、「近代国家」の形成などに還元されない、複合的な帝国の統治を可能にした「ブリテン」の経験と記憶の一部が明らかにされるとともに、その研究成果の国際的な、あるいは分野横断的な発信がなされた。

もっとも、本研究のテーマの一つであった「コモンウェルス」については、期間内に十分な検討を行うことができなかった。また、「君主」や「王権」の政治思想に関しては、ジェームズ6世・1世以外にも対象を拡大し、理解を深める必要がある。とりわけ、「内乱」や「王殺し」、「王政復古」、「名誉革命」などを経験した17世紀の「ブリテン」の政治思想を、以上の成果を踏まえ、「王権」と「コモンウェルス」との緊張の観点から見直すことが、今後の大きな課題の一つになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Toshimichi Kimura, Orheus' Theatre: Civility and Empire before the Civil War, Hosei Kenkyu (法政研究), 査読なし, vol. 85, no. 3・4, 2019, 699-720

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=1&amode=MD100000&bibid=2231035&opkey=B155911254934140&start=1&listnum=0&place=&totalnum=3&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=000

木村俊道、「大ぶりたんや国」の統治術—ジェームズ六世・一世と顧問官たち、政治研究、査読有、2018、第65号、35-67

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=1932028&opkey=B155970174654164&start=1&listnum=1&place=&totalnum=12&list_disp=20&list_sort=6&fc_val=contents%23%40%23120700000003&cmode=0&chk_st=0&check=0000000000

木村俊道、マキアヴェッリ、ベイコン、ホッブズの周辺—初期近代英国政治思想史コレクション 1605-1700、政治研究、査読有、第64号、2017、83-90

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=1916264&opkey=B155970174654164&start=1&listnum=2&place=&totalnum=12&list_disp=20&list_sort=6&fc_val=contents%23%40%23120700000003&cmode=0&chk_st=0&check=0000000000

〔学会発表〕(計4件)

木村俊道、「大ぶりたんや国」の統治術—ジェームズ一世と顧問官たち、日本政治学会、2017

木村俊道、「「古代の思慮」から「近代の哲学」へ？—マキアヴェッリ、ベイコン、ホッブズの政治学をめぐって、日本哲学会、2017

Toshimichi Kimura, Orpheus' Theatre: Civility and Empire before the British Revolution, Kyushu University Early Modern Intellectual History Seminar, 2017

木村俊道、2つの資料紹介 マキアヴェッリ、ベイコン、ホッブズの周辺 初期近代英国政治思想史コレクション 「政事の構造」の「古層」 丸山眞男 1974年九大講演、政治研究会、2016

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。